

長崎県松浦市青島におけるチョウセンイタチの生態

I. 生息数、性比、体重、行動など

宮城邦治・白石 哲・内田照章(九大・農・動物)

Some notes on the yellow weasels introduced into Aoshima Island, Matsu-ura City, Nagasaki Prefecture

KUNIHARU MIYAGI, SATOSHI SHIRAIKI,
TERU AKI UCHIDA

長崎県松浦市青島は1961年頃から1964年にかけてドブネズミの異常増殖に見舞われ莫大な被害を蒙った。崩壊鎮圧のために福岡県甘木市からチョウセンイタチ20頭(雄13頭、雌7頭)が1966年に導入された。最近、これらのイタチが増加、住家へ侵入して種々の加害をなすので、間引きしたいという松浦市役所からの相談を受けた。演者らは同島に生息するイタチの数を把握することが先決だと考えて、1974年の秋から1975年早春にかけ箱わなを用いて記号放逐を実施した。その結果、面積約70haの同島における捕獲総数は76頭(雄51頭、雌25頭)、当時の生息密度は1.09頭/haであった。また、性比に著しい偏りがあり、雄:雌の割合は204:100となつた。捕獲された雄51頭のうち28頭、雌25頭のうち14頭がそれぞれ再捕獲され、同一個体でわなにかかった最多回数は雄で7回、雌で8回であった。捕獲されたイタチの外部計測値には著しい雌雄差がみられた。とくに体重においては捕獲された雄の小体重は410g、最大体重は955g(平均672g)であった。他方、雌の最小体重は200g、最大体重は380g(平均293g)で、雌は雄の $\frac{1}{2}$ 以下の体重であった。記号放逐したイタチの捕点を地図上にプロットした結果、雌雄の行動域に違いがあることが知られた。雄には住家地域を中心に狭い範囲を活動する定住的タイプと、島の周縁部の灌木林などを中心に広い範囲を活動する放浪性タイプの2型が認められた。一方、雌では島の周縁部の灌木林を中心に狭い範囲を活動する定住的タイプが多く認められた。なお、青島におけるこれらイタチの生態調査は現在も継続中である。

飼育力ヤネズミの繁殖 II.

兼松仁郎(長崎造船大・生物)

Breeding of the Japanese harvest mouse, *Microtus minutus*, in the laboratory. II.

NIRÔ KANEMATSU

1972年6月に採集したカヤネズミ巣仔が、同年9月より室内で繁殖を始め、以後3年間の累代飼育で6代、122腹、302仔をえ、次の知見をもえた。

1. ごく普通の室内飼育条件下で、カヤネズミは通年繁殖する。

2. 産仔数は、一腹1仔から4仔までみられ、2仔と3仔の例が多く、5仔以上の出産成功は、まだみられない。

3. 産仔の平均体重は、一腹1仔の場合で1.25g、一腹2仔で1.26g、3仔で1.23gと差はないが、4仔の場合は1.10gで明らかに小であった。

4. 出生当日における産仔体重は、0.7gから1.45gまで、個体差がかなり大きく、また、1g未満のものも稀ではない。

5. 産仔数および産仔体重は、ともに母獸の齢や体重にではなく、その産次に関連しており、いずれも、初産から第2産、第3産へと増加し、第4産以後は減少する。

6. 最若の出産は、生後60日齢の雌にみられ、逆に、2年余経過してなお出産する例もあるが、一般には、この頃、繁殖活動は衰退する。観察された最多出産回数は7である。

7. 妊娠期間は20日前後としてよいが、20日未満の例は多く、最短では16日間であった。

8. 市販の金属ケージ(17又は21.5×30×10cm)での飼育で、1100日齢以上生存する個体もあり、長期飼育に十分であり、交尾から離乳までの繁殖過程を完結させることもできる。